

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

RiITALIA (イタリア再発見) ⑩

* 語学の道 *

国司 航佑

読者諸賢が初めて外国語に興味をもったのはいつだろうか。筆者は、中学校に入学する直前、友人の母親が経営していた英語塾に通うことになった。友人がいるからという他愛もない動機であったが、とにもかくにもそこで英語の学習を始めた。思うに、それが筆者の外国語との出会いだった。

中学校で学ぶ科目の中で、英語はもっとも好きな教科だった。授業中にいきなり外国人がやってくるのがあったが、そんなときには、ここぞとばかりに質問を浴びせかけた。大したことは言えなくても、自分の考えたことを、母語とは違う言語を使って表現することは楽しかった。もちろん、なんらかの返答が返ってきたときは、尚更うれしかった。そのうち筆者は、授業の外でも英単語を覚え始めた。そうしてある日、英作文の授業で自分で学んできた言葉を使ってみた。先生がそれをチェックしてきたとき、誉められることを期待して待っていると、予想に反して叱責された。新しいことに手を出す前に、今までやってきたことを完璧にこなさない。先生はそのようなことを、筆者の答案を見ながらクラス全体に向けて言った。

この先生が言わんとしたのは、何事においても、難しいことに挑戦する前に基礎をしっかりと固める必要がある、というようなことだったのだと思う。当時は彼の言葉を忌まわしく思ったが、今になって振り返ってみると、そうした考え方にも一理ある気がしないでもない。順序正しく、基本的なことから一つ一つ身に付けていく—それがどんな学問にも共通する正当な学習法であるということは、やはり反論のしようがない事実なのだろう。しかしながら、自分自身が教壇に立つ身になった今、あの先生の教えを金科玉条にしているかといえば、

そんなことはない。様々な言語との多種多様な出会いを通して、いつからか、筆者は日本における既存の語学教育のあり方に満足できなくなっていたのである。



【昭和時代の英語の授業の風景】

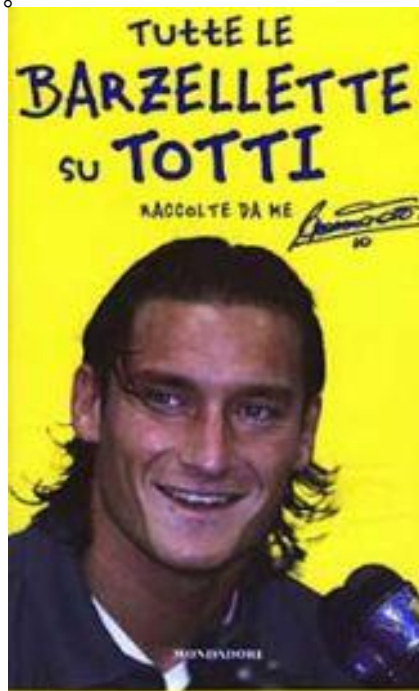
外国語の学習について真剣に考え始めたのは、今から15年前、イタリアに留学したときである。動詞の活用を覚えることがイタリア語学習における基礎なのだとなれば、筆者のイタリア語学習は、確かに基礎固めから始まったといえよう。are 動詞の活用、ere 動詞の活用、ire 動詞の活用、不規則動詞の活用、これらの反復練習こそが、イタリア語の世界の入り口であった。ところで、こうした動詞の活用の反復練習をこなした結果として、筆者はすぐさまそれを完璧に習得していたのだろうか。答えは否である。あの時点で、例えば、仮に日本式のテストを受けていたとしたら、60 点位しか取れなかったのではなかろうか。筆者は、机上の学習の成果はその程度の不完全な形での暗記でよしとして、とにもかくにもそれらを生活の中で使い始めたのである。幸いなことに、わがホストファミ

リーの構成員は厳格な人たちだったから、間違いを犯す度に、彼らに訂正してもらえた。そして筆者は、このようにトライ&エラーを繰り返しつつ、徐々に正しいイタリア語を身に付けていったのであった。

先ほど、「日本式のテスト」という表現を使った。例えば、動詞 *uscire* についてその活用表を再現せよ、などという指示を出す問題(答えは *esco esci esce usciamo uscite escono*)—こういうものが、筆者の考える日本式のテストである。確かに、これらの活用形を覚えることは、イタリア語を使いこなせるようになるために欠かせない作業である。しかしその一方で、こうした「テスト」によって確認できるのが活用形のスペルの習得具合のみだという事実を忘れてはならない。発音、意味、語法、その他の要素の習得具合は、このようなテストでは測りえないものなのである。だから、「日本式テスト」を学生に受けさせるとき、教師の方は、それが語学力の一側面のみを確かめるために存在しているのだとはっきり伝えなければならないのではないだろうか。そうしないと、「満点」を取ることが語学力を身に付けたことの証であると勘違いされかねないからである。有名大学の入学試験に合格した者は、おそらく、6年間の学校教育を通して、英語のテストで満点に近い点数を取り続けた人間であろう。だが、これらの人間が英語の運用能力に優れているかと問われれば、筆者はそういうケースはむしろ稀であると考え。そして、筆者のこの答えが正しいものなのだとすれば、我国における語学教育の現状は、当然疑問符を付されてしかるべきものなのであろう。

例えば動詞 *uscire* に関して、筆者はその活用よりも先に、その用法を覚えるべきだと思う。「内部から外部へと移動する」という第一義は、まず踏まえておくべき語義だろう。だが、この単語が頻繁に使われるのは、金曜日や土曜日の夜に遊びに(飲みに)「出かける」という意味において、もしくは恋人と「付き合う」という意味においてである。ところでそもそも、日本人学生は、ヨーロッパ各国では、週末の夜に友人や恋人と外出する習慣があるという事実を知っているのだろうか。もし知らないのだとすれば、*uscire* の活用を暗記する前に、その習慣を学んでおく必要があるはずだ。*uscire* という単語が何を意味するのか、そしてそれがどのような場面で使われるのか—こういう語義や用法を把握することに比べたとき、活用の丸暗記はそこまで大事なことはないように思われる。仮に、活用の記憶があやふやなままの状態、例

えば *esciamo stasera* と間違えてイタリア人に言ってみたとしよう。あるいは、不定詞を使って、*noi uscire stasera* とごまかしながら言ったしよう。どんな形であっても、「今晚一緒に遊びましょう」という大意は、間違いなく通じるはずである。実際、このような動詞の活用を間違えたイタリア語は、「外国人の話すイタリア語」として、しばしばテレビドラマや映画で見かけるものである。ストーリーの進行のためには、登場人物が意味不明のセリフばかり言っているのは困る。しかし、外国人であることを何とか示したい。「間違っているけれども意味が通じるイタリア語」というものを再現しよう—おそらくこうした意図から、セリフの中の動詞の活用ミスをあえて加えたりするのであろう。昔、トッティというサッカー選手の無知を面白おかしく描いた『トッティにまつわるバルゼッレッタ全集』(*Tutte le barzellette su Totti*、「バルゼッレッタ」の意味については、本誌 vol. 33、n. 261、「イタリア再発見」⑥を参照されたい)という本があったが、その中でトッティは、本来 *Io sono andato* となるべき箇所、*Io ho andato* と言われていた。近過去の形を作るときに、*essere* と *avere* という二つの助動詞のどちらを使用しようすべきか、という規則は初歩的な知識であるが、これを間違えても意味は通じるのである。もちろん、そんなイタリア語をイタリア人に聞かれた場合、間違いを訂正されるか、もしくはばかにされることになるに違いないだろうが。



【収益の全額がユニセフに寄付されたいらしい…】

間違いを犯して、ばかにされるなんて耐え切れない、それを訂正されるのも恥ずかしい、読者の中にはそう思う向きもあるだろう。しかし、それは外国語を学ぼうとする限りにおいて避けては通れない道である。というのも、われわれ日本人には、たとえ、他人からはペラペラ話していると思われる程の会話力に達したとしても、もしくは読み書きがかなり高いレベルでこなせるようになったとしても、結局のところ、間違いを全く犯さないほど完璧にイタリア語を使いこなせるようになることなど、まずありえないからだ。逆にいえば、間違いを恐れて、いつも同じ表現のみを使っていたり、口数を減らしてしまったりするようでは、いつまでたっても語学力は決して向上しないのである。例えば筆者は、間違いを犯したら訂正してくれ、と友人に頼むことにしている。もちろん、間違いを指摘されたら悔しいし、恥ずかしい思いもしない訳ではない。けれども、訂正されたことは必ず記憶に残る。だから筆者は、間違いを敢えて犯すことすらある。

ところで、筆者の場合、恥ずかしい間違いを犯したことは、それがいくら昔のことであっても覚えているものらしい。15年前の留学体験については、その手のエピソードが枚挙のいとまがないほどに沢山ある。ある日、昼ごはんの時間に、ショッピングセンターの一角で、男女 10 人ほどのグループでピザを食べていたことがあった。その当時、筆者はイタリア語の単語をあまり身に付けていなかったから、知っている英単語をイタリア語風に発音したりしてその場を凌いだりすることがあり、その時は、レモンのことを伝えたくて、limone といってみた。すると、こともあろうか、周りの友人に物笑いにされてしまった。そう、筆者は図らずも、イタリア語においては卑猥な意味をもつ単語 mona の複数形 mone を、丁寧に定冠詞を添えつつ、公衆の面前で高らかに発していたのである。顔を真っ赤にしながらかそこ学んだのは、limone という正しい発音(及び綴り)や mona という卑猥な単語の意味だけではない。冠詞と名詞の組み合わせが、一つの音のつながりとしてイタリア人の耳の中で認識されているということ、さらにはイタリア語と英語の間に、音声的に非常に似ているが少

しだけ異なった単語が存在しているという事実を知ったのであった。

似たような経験は、ある日、親友のダーリオと会話しているときにも起こった。どういう文脈だったかはもはや覚えていないが、筆者はある時点で、correggere(訂正する)という単語を、間違えて correggiare と発音した。すると、ダーリオはいきなり笑い出した。そうこうしているうちに、ホストブラザーのリーヴィオがやってきてどうしたのと訊く。事情を説明しようとしたダーリオは、コースケ(筆者の下の名前)もう一度同じことを言ってみてと頼んできた。筆者は、怪訝そうな顔つきをしたまま、いま一度 correggiare を発した。すると、リーヴィオもまた腹を抱えて笑い、ダーリオは、それは「おならをする」という意味だよと言いながら再び笑い転げた。筆者はそれに対して、「おならをする」はイタリア語では scorreggiare じゃないか、僕が発音したのは correggiare だぞ、と不服そうに告げた。するとダーリオは、語頭の s はなくても、あるように聞こえるんだよと返した。

この恥ずかしい間違いもまた、筆者に多くのことを教えてくれた。scorreggiare という単語の意味とアクセントの位置(後ろから二番目の音節)や、correggere の発音とアクセントの位置(後ろから三番目の音節)とを覚えただけではない。イタリア語の発音において、子音よりも母音の方が大きな意味をもつということ、そして、アクセントがおちる音節こそがもっとも大事だということも、この体験を通じて学んだのである。さて、この記事を読んだ読者諸氏には、イタリア語の実践の場においては、ぜひ間違える勇氣をもってもらいたい。間違いを correggere してもらうことこそが、語学の上達のために最もよい手段だ—筆者はこう信じて疑わないのである。

[図版の出典]

http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/L31_100/a_ph_100-0014.html

<http://www.calciatori-online.com/francesco-totti/barzellette-totti.php>

(元当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『素晴らしき自転車レース⑬』

～映画の中の自転車(後篇)～

谷口 和久

前号(2013年4月号)に引き続き、自転車が登場する映画はいかに名作であるか、ご紹介していきたい。

1997年に製作されたロベルト・ベニーニ不朽の名作『ライフ・イズ・ビューティフル』La vita è bella。幸せな家庭が時代の波にのまれ、翻弄されていく。その中で、必死に妻と子を守ろうとする主人公ガイド。最後はハッピー・エンディングではあるものの、二度と帰ってこないガイドのことを思うと、やはり、いたたまれない気持ちにさせられてしまう。ほんとうに素晴らしい映画だ。



【『ライフ・イズ・ビューティフル』より】

劇中、自転車が登場するシーンは2つ。いずれも、まだガイドたちにとって幸せな時代の情景だ。

ひとつめは、アレツォのグランデ広場でのこと。自転車がまたがり猛スピードで駆け下りてきたガイドは、よけきれず歩行人とぶつかってしまう。ぶつかった相手は、意中のお姫さまドーラ。倒れて折り重なる二人。同じようなシーンは、前にもトスカーナのわら小屋で見られた。「Buongiorno,

Principessa!(こんにちは、お姫さま!)」。うれしそうに声を上げるガイドと、ぶつけられたというのにまんざらでもなさそうな表情のドーラ。二人の距離がまたひとつ近づいた、印象的なシーンだ。

ふたつめも、舞台は同じくアレツォのグランデ広場。先のシーンから数年たち、この頃すでに2人は結婚して、子供も授かっている。親子3人で1台の自転車に乗ってグランデ広場を駆け下り、妻ドーラを職場に送り届ける。その後、ガイドと息子ジョズエは自分たちの書店におもむくが、もうその頃にはユダヤ狩りの影がしのびよっており、店先にはいやがらせのいたずら書きが……。自転車に乗っている時の意気軒昂とした表情と、店先で落書きを見つけた時の、ガイドの表情の変わり様は悲しいほどだ。そうして、いまわしき収容所送りの日が、刻一刻と近づいていくのだった。

次にご紹介する映画は、これまでとはまったく毛色の異なる映画だ。『ニュー・シネマ・パラダイス』、『イル・ポステーノ』、そして『ライフ・イズ・ビューティフル』、いずれも心あたたまる、そして切なくなる映画だったが、この映画は、おぞましく不快の極みとしかいいようのない作品。そのタイトルは、『ソドムの市』Salò o le 120 giornate di Sodoma (1975)。鬼才パオロ・パゾリーニ監督の遺作である。

この記事を書くために、初めて通して観たが、あらためてあら筋を頭の中で思い起こすことすらおぞましいので、DVDのパッケージに書かれた解説文から引用することをおゆるし願いたい。

「1944年。第2次大戦下の北イタリア。ナチズムに加担する大統領、大司教、最高判事、公爵の4人の権力者は町中から美少年美少女達を狩り集め、レイプ・スカトロ・ホモ・ソドミー・オナニー・そして虐殺と、ありとあらゆる想像を絶した地獄の大パノラマを繰り広げる」

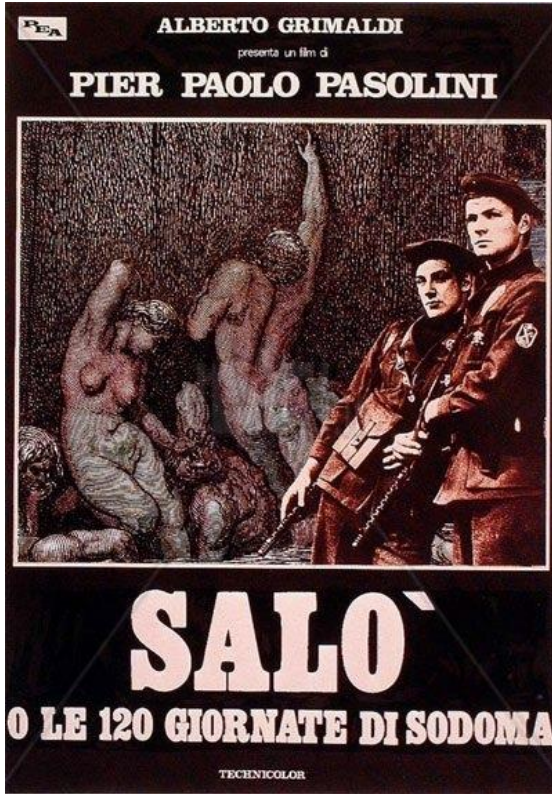
「崩壊ナチの最期の足掻きを象徴するのか、ファシズムの傀儡達を中心に展開する凄惨な修羅場」

「パゾリーニ映画の集大成たるべく凄まじい画面の連続が観る者を打ちのめす」

「パゾリーニ自身の強烈的な反体制・反ファシズ

ム思想を大きく打ち出した一大金字塔にして、世界各国で本編削除、本編修正、上映中止、上映禁止が相次ぎ、映画史上最大の混乱と論争を巻き起こした前代未聞の問題作」

(以上は全て(株)エスピーオー発売のDVD 外書きより)



【『ソドムの市』DVD パッケージ】

自転車が登場するのは、冒頭の美少年狩りのシーン。北イタリアののどかな農村。自転車で走る若者たちの前に、銃を持った男たちが立ちはだかる。とっさに自転車の向きを変え、必死でペダルをこいで逃走をはかるが、あっけなく車に行く手をさえぎられてしまう。ここでの自転車は、前号で紹介した『E.T.』のように、「自由闊達に逃げおおせることのできる」乗り物ではなく、「まったく無力で無策な」ものとして描かれているように感じられてしかたがない。そして、この無力感、この映画の中でひたすら虐待される若者たちの姿につながってくる。だが、よくよく考えれば、自転車など無力な乗り物にすぎないのだろう。人間そのものが無力であるように。

ところでこの映画、なんと驚いたことに、主人公の権力者を演じた4人のうち、3人は素人というではないか！ラテン語教師、洋服屋のあるじ、そし

て作家が本職という3人は、役者顔負けの演技で、嬉々として(!)虐待シーンを演じているのである。なんともはや・・・。



【『ソドムの市』冒頭の逃走シーン】

最後にご紹介するのは、自転車だけではなく、自転車選手たちも登場した映画だ。タイトルは、『ジロ・ディ・イタリアのト』 Totò al giro d'Italia (1948)。イタリアの喜劇王トの主演作で、彼の名がタイトルに冠された初めての作品でもある。

この映画では、コッピ、バルタリなど、錚々たる当時の一線級選手たちが登場し、タイトル通り、実際にレースを繰り広げるのである。

ト演じるころの大学教授が、ある日、美人コンテストに審査員として参加する。そこで見そめた美女ドリアーナに言いよるが、彼女からは「自転車レースで勝ったら、結婚してあげてもいいわ」との返事。レースどころか、それまで自転車もロクに乗ることのできなかつたト。必死のあまり、悪魔にたましいを売り渡して、レースで勝たせてもらう約束を取り付けた。

レースの要領すらまったくわかっていないトは、スタートラインで、トップ選手たちが居並ぶ前方にあとから割り込み、コッピやバルタリに気軽に握手してまわったりしている。そして、号砲が鳴って周りが一斉にスタートしても、キョトンとしてひとりポツンとスタートラインに残る始末。しかしながら、いったん走り出すと、次々と勝利をかつさらってしまうのだ。まったくの無名選手であるトが次々と勝っていくのを見て、あまりの不自然さに周囲も怒り出してしまふ。なんといっても、コッピやバルタリをおさえて、勝ちまくっているわけですからね。

勝利を重ねるごとに、愛しのドリアーナとの生活が夢から現実に近づくことに嬉々とするわけだが、実は、悪魔との契約は、最終的には勝利と引

き換えにたましいがもぬけの殻、すなわちほぼ死に等しい状態となることを意味していたのだ。

レース最終日、もはや地獄に落ちることを覚悟していたトであったが、彼の母親が機転をきかせて悪魔を眠らせることに成功。悪魔の力が及ばぬ間にうまくゴール前で転んで、総合優勝は立ち消えとなったのだ。しかしながら、そこまでして自分と結婚したいという気持ちを知ったドリアーナは、優勝の約束こそ果たされなかったものの、トと結ばれる決心をしたのであった。



『ジロ・ディ・イタリアのト』より ト(左)とコッピ

映画の中では、往時のレースシーンがふんだんに盛り込まれている。バケツやホースでの水かけシーンや、補給所ではワインが出てきたり。現代のようにシステムティックではないけれど、それだからこそ、人々を熱狂させたなにかが、かつてのレースにはあったのだ。

[参考資料]

『映画 100 年 STORY まるかじり イタリア篇』(柳澤一博著, 朝日新聞社, 1994)

Wikipedia.it 関連情報

(当館スタッフ)



編集・発行 / (公財) **日本イタリア会館**
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>

イタリアンレストラン紹介

～京都～

アンチョビカフェ

1995年創業のカジュアルなイタリアンです。
野菜とワインは生産者の見える
確かなものをご用意いたしております。

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
おすすめワインを一杯サービス

住所: 京都市左京区田中西大久保町47-2
叡山電鉄 元田中駅 北へ50メートル
HP: <http://anchovie-cafe.jp>
電話: 075-722-8311



～イタリア文化セミナーご案内～

モザイク教室

モザイクはガラス、タイル、大理石の小片を並べて
つくる装飾技法です。今回は、コースターとキャンドル
ホルダーを作成します。

[日 時]

09月17日(火) 13:00～15:30 コースター
10月01日(火) 13:00～15:00 キャンドルホルダー
10月22日(火) 13:00～15:00 キャンドルホルダー

[場 所]

日本イタリア会館(京都本校)

[参加費]

コースター 会員 5,000円、受講生・一般 6,000円
キャンドルホルダー 会員 8,000円、受講生・一般 9,000円

*詳細は事務局までお問合せ下さい